

食糧メーデーと 天皇プラカード事件(1)

松島松太郎氏*に聞く



はじめに

- 1 生い立ちと戦時の生活
- 2 敗戦と労働運動の復活(以上本号)
- 3 食糧闘争と食糧メーデー
- 4 天皇プラカード事件

はじめに

1945年度産米の未曾有の不作や、引揚者の急増などで逼迫していた東京地方の食糧事情は、1946年の年明け以降、日を追うごとに悪化し、遅配・欠配がつづいた。この食糧逼迫は、幣原喜重郎内閣が1946年2月17日に食糧緊急措置令を公布して供出を促したものの、効果がなく、5月に入って食糧危機はピークにたっし、各地で隠匿物資の摘発や「米よこせ闘争」が展開された。

こうしたなか、関東食糧民主協議会や労働組合では左派系の関東労協(関東地方労働組合協議会)が主体となって、1946年5月19日、皇居前広場に25万人を集めて「飯米獲得人民大会」を開催し、配給米の確保や食糧の人民管理を政府に要求した。この集会は1946年5月1日における復活メーデーにつづくもので、いわゆる「食糧メーデー」と呼ばれている。

松島松太郎氏は、この食糧メーデーに「詔書 國体はゴジされたぞ 朕はタラフク食ってるぞ ナンジ人民 飢えて死ぬ ギョメイギョジ」と書いたプラカードを自ら作成して参加した。松島氏は、このプラカードの文言が明治憲法下の刑法が定めた天皇に対する「不敬罪」にあたるとして逮捕され、1948年5月26日に免訴になるまで公判闘争をたたかわれた。

松島氏は当時、田中精機労組(東京・港区)の委員長で、ほかに関東労協の常任委員、関東食糧民主協議会の書記局員、日本共産党市民対策部員をなさっておられた。そこで、松島氏からの聞き取りは、天皇プラカード事件の顛末に関してだけでなく、テーマを表題のように決め、戦後初期における日本社会運動の動態を象徴的に示す食糧メーデーの経過と合わせて証言を願った。

松島氏からの証言は2回にわたった。最初は、1988(昭和63)年10月26日、当研究所における産別会議研究会のヒアリングとして、法政大学多摩キャンパス5階の当研究所の会議室において、2回目は1989(平成元)年9月28日、法政大学市ヶ谷キャンパス内80年館7回小会議室において、吉田健二が聞き手となって実施した。本稿は、この2回にわたる氏の証言を吉田の責任においてまと

めたものである。

なお、大原社会問題研究所では社会運動家の証言を発表する場合、原稿化に際しては本人の加筆・補正を原則としている。そして、1回目の証言は本人の加筆・補正を得ていたが、2回目の証言についてはテープ起しの作業をおこなわないうちに松島氏が亡くなられた。このため、本証言では夫人の松島せん氏の協力を得て、事実関係や事実経過の記述に正確を期した。

(吉田健二)

*【松島松太郎氏略歴】

1915(大正4)年10月22日、東京・芝高輪の高野山東京別院の境内(東京市芝区二本榎2丁目18番地)に、唐木細工職人の父末吉・母いねの次男として生まれた。1930(昭和5)年4月、高等小学校を卒業して日本銀行に給仕として就職し、同時に大倉商業学校の定時制に入学した。在学中、のちに理論社など出版業を営む小宮山量平らと左翼グループを結成した。1934年2月に検挙されたが、翌3月の卒業直前に釈放された。

1934年4月試験に合格して行員に昇格し、出納局経理課に異動となった。同月、中央大学専門部法律学科(二部)に進学した。翌35年春、肺結核を患い、短期間で職場に復帰したが、同年10月に再発し、39年まで闘病生活をつづけた。休職中に、のちに経済学者となる大門一樹らと山田盛太郎著『日本資本主義分析』(岩波書店、1934年)や、野呂栄太郎らの『日本資本主義発達講座』(同、1932年5月~33年8月)などを読み、社会科学の勉強をつづけた。

この間、学業の継続を断念し、徴兵は丙種合格で免除となり、日銀も休職の猶予期間がきれて38年春ごろ退職した。

1941年3月、東京・三田の田中精機株式会社に総務課長扱いで就職した。間もなく工場内に左翼グループを結成し、産業報国会を隠れ蓑に徴用工や学徒動員で召集された労働者を啓蒙した。

敗戦をへて1945年11月初旬、日本共産党に入党し、同時に田中精機に労働組合を結成して委員長に就任した。翌46年1月、春日正一らと連絡をとりながら品川、港区内に労働組合の結成と日本共産党の組織づくりを指導し、また城南労協と関東労協の結成に尽力した。46年4月、日本共産党東京地方委員会の委員に就任した。これより先、同年2月に党本部の市民対策部(部長・岡田文吉)の部員となった。この間、関東食糧民主協議会の書記局員を務め、関東一円で隠匿物資の摘発や食糧闘争を指導した。

1946年5月19日、食糧メーデーにおける天皇プラカード事件で検挙された。同年11月2日、東京地裁が罪状を旧刑法の「不敬罪」ではなく、名誉毀損罪に変えて懲役8か月を判決したのを不服として控訴した。翌47年6月28日、東京高裁は日本国憲法の公布にともなう大赦令により免訴としたが、なおも上告した。48年5月26日、最高裁は公訴権の消滅を理由に、天皇プラカード事件の上告を棄却した。

のちに党活動指導部の全国オルグを務め、1950年以降は神奈川県川崎市に転居して日本共産党の専従として活動した。60年の安保闘争では神奈川県民会議の代表幹事として運動を指導した。1973年11月中央委員に就任した(神奈川県委員長を兼任)。のち中央党学校(静岡県・伊豆)の主事を務めた。2001年8月9日、胃癌により死去した。享年85歳。

1 生い立ちと戦時の生活

昭和天皇の病氣

本日は、松島松太郎さんをお招きしまして、1946年5月19日における食糧メーデーと天皇プラカード事件について証言をいただきます。なお、本日の研究会にオブザーバーとして、労働運動研究家の黒河内隆さんが出席されております。黒河内さんは日本起重機株式会社（大田区）の元社員で、1945年から60年までの自らの組合運動を記録・集成した『日起労働組合運動史資料』（1965年）を編集された方です。

松島 本日はどうぞよろしくお願ひします。裕仁天皇すなわち昭和天皇が病氣になり、現在、巷ではさまざまな行事自粛の申し合わせが相次ぐ異様な事態になっています。昭和天皇のXデーも話題になっていますね。

昭和天皇が病床にあることを宮内庁が発表して以来、私はなにかと落ち着かない生活になりました。というのはこの間、新聞社や雑誌社から「天皇プラカード事件について取材したい」との申し入れがありました。先週も突然、新聞記者を名乗る人から電話で取材の申し入れがありました。

私はこの種の取材を断っています。事実を歪めて伝えられたりする恐れがあるからです。ただし作家の井出孫六さんの場合は、自ら「取材に協力してほしい」との礼を尽くした連絡があり、岩波書店の『世界』編集部からも正式な要請がありましたので、これを受けました。井出さんの原稿は、「天皇プラカード事件」と題して、『世界』の12月号（1988年12月）に発表されるそうです。

さて、今回の報告にあたって、研究所から送って頂いた労働省編『資料労働運動史』（昭和

20・21年版）の記事や、『アカハタ』『民衆新聞』などに載っている記事は、私が知らない事柄も多数書かれていて記憶を呼び起こすのに大変参考になりました。岩田英一の「米よこせ世田谷区民大会」や食糧メーデーについて回顧された記事（『岩田選挙科学研究所特報』1987年2月10日）は、実に面白かったですね。岩田さんとは現在付き合っていないが、当時、隠匿物資の摘発や食糧闘争で一緒にしました。

大正天皇のXデー

松島 昭和天皇のXデーとも関連しますが、本題に先だてて嘉仁天皇すなわち大正天皇のXデーについて述べたいと思います。

大正天皇が亡くなったのは1926（大正15）年12月25日です。葉山御用邸で亡くなっていますね。当時私は小学校5年生で、芝高輪の高野山東京別院境内の長屋に住んでいたが、愛宕山のすぐ下に親戚がおりときどき遊びに出かけていました。とくに年末になると愛宕山に歳の市が立って賑わうので楽しみだったのです。

歳の市は、当時、愛宕山界隈に住む下積みの小商人や職人が生計の不足を補う一つの資金稼ぎの場でもありました。歳の市で売られる正月用の飾り物や用品は縁起物で、際物だから利益がばろい。連中は歳の市に店を出して、相当な儲けを得て年末・正月を過ごすのです。

ところが1926年の暮近くになって、宮内省から大正天皇が重篤になられたとの発表があったのです。歳の市の勧進元や店を構える予定の商人連中は大変困ってしまった。彼らは嘉仁天皇がいつ死去するかわからない、そうかといって頼みの歳の市を中止にするわけにもいかない、さあどうしたらよいものかとやきもき困惑していたのを子供心に見ておりました。

とどのつまりは、年の瀬も押し詰まった12月25日に天皇が亡くなった。その結果、年末の行

事はいっさい自粛中止となり、歳の市もすっ飛んでしまいました。1927年正月の開店を含め、行事いっさいが取り止めとなったのです。彼らは当てにしていた儲けどころか、特注で仕入れた商品を返すこともできず、結局借金だけが残ってがっかりしたのです。

日銀の給仕となる

松島 昭和の金融恐慌は、1927年3月に渡辺銀行が取り付け騒ぎで休業したのが発端といわれています。銀行の取り付けは4月以降、東京全域に広がり、中井銀行や第六五銀行、台湾銀行なども休業しました。

当時、私のクラスに華族銀行といわれた第十五銀行の重役の息子がいて、小学6年生の新学期が始まった4月、下校途中「お前の親父の銀行は大丈夫だよ。十五銀行が潰れるようだ」と日本の銀行は総崩れだろう」などと生意気な話をしながら帰宅したら、NHKラジオがその第十五銀行も取り付けで休業したというニュースを聞いて驚いたことがありました。

私は、第1回普選の実施や3・15事件が起きた1928年3月に尋常小学校を卒業しました。職人の生計はまことに厳しい。親は、私が職人としてでなく、銀行に勤めて堅く生きることを望んでいたのです。私は第一銀行と安田銀行の給仕の試験を受けましたが落ちてしまいました。私は飯田橋(千代田区)の職業安定所に何回か通ったのですが、不況のさ中で就職口が無かった。親は仕方なく、私が高等小学校に進むことを認めてくれました。

日銀の雇員になられたのは、高等小学校を卒業されてからです。

松島 そうです。当時、中等学校は5年制でした。中学への進学は学資の面で無理だったのです。私は2か年の小学校高等科をへて、1930年4月に日銀の雇員試験に受かり、給仕として

採用されました。初任給は14円で、諸手当を含めて21円50銭だったと記憶する。これは当時14・15歳の給与としては、高給の部類にあったと思います。

私が日銀を希望したのは、給与が高く、職場が安定して首切りがないことのほか、夜学に通う雇員に対してさまざまな便宜を図ってくれていたからなんです。給仕は朝9時から4時までの勤務です。早退も可能で、なによりも夜学に通う行員や雇員に対して日銀は特別に夕食を提供していたのです。

左翼に興味をもつ

松島 私が左翼運動に関心をもったのは大倉商業へ進学してからです。当時、大倉商業に左翼グループが結成されていて、青野季吉訳の『帝国主義論』など社会科学の文献を読んだり、創刊されたばかりの日本共産党の機関紙『赤旗』(セッキ)、これはガリ版刷りでしたけれども、どこからとなく回ってきて隠れて読んでいました。

左翼グループの指導者の一人に、現在、出版界の長老となっています小宮山量平さんがおります。私は、小宮山さんと争議中の工場にピラ撒きに行ったり、築地小劇場で「風の街」などの劇を鑑賞した記憶があります。演劇というと1929年ごろ小林多喜二の「蟹工船」、あるいは「北緯五十度以北」という題で新築地劇団が帝劇で上演したのですが、これも在学中に鑑賞しました。

左翼グループの活動といっても、日本共産党の指導を受けたとか街頭運動をおこなったというのではなく、社会科学の文献を読んで批評するとか演劇鑑賞とか、いわば文化サークル的な活動なんです。私自身、共青に加入していたわけでもない。

けれども3・15事件以降は、こうした文化活

動さえも許されなくなりました。私は、翌30年に中央大学法学部の二部に入学しましたが、直後に警視庁に検挙され、中野警察署で数週間、特高刑事から取り調べられました。このとき小宮山量平さんも検挙されています。彼はのちに東京商大へ進み、上原専禄先生に指導を受けたといっていました。大河内一男先生がこの時期における日本労働運動を「暗い谷間の時代」と規定しましたが、とにかく厳しい時代でした。

行事自粛の問題について

松島 昭和天皇の病気にともなう行事自粛との関連で、この点についても指摘しておきたいと思います。大正天皇が亡くなったあと、元号が「昭和」と改元され、摂政だった裕仁皇太子が昭和天皇に即位しました。そして、この後の行事を岩波の『近代日本総合年表』（1984年）で調べますと、喪が明けた1928年11月10日に京都御所において「即位の礼」が、同じ11月14日に即位して最初の「大嘗祭」がおこなわれていますね。

また、昭和天皇の「即位の礼」にあわせて、即位奉祝の式典や提灯行列が全国各地で催され、昭和天皇の治世に対する敬意と期待が国民運動として盛り上がりました。

ところがこの間、すなわち1926年12月25日における大正天皇の死去から、1928年11月14日における「大嘗祭」の間に、この時期は、昭和の金融恐慌が起り、また1928年2月に田中義一内閣のもとで普選が実施されましたが、翌月に日本共産党に対する弾圧事件、すなわち3・15事件が起きています。大山郁夫さんらの労働農民党はじめ、評議会など左派系の労働組合に対しても解散命令が出されましたね。

他方で、治安維持法が改正され、その違反者に対して死刑を定めているのです。全国の各府

県の警察本部に特高課を設置し、警察署に特高刑事を配置したのもこの年（1928年）7月であったわけで、これより先、日本は山東出兵をしています。

要するに、大正天皇から昭和天皇への代替わりの服喪行事や祝賀の行事が立てつづけにおこなわれている間に、どさくさに紛れて、弾圧立法の制定や中国に対する戦争拡大が策謀されていたわけですね。今回も、昭和天皇が死去した際、天皇家の代替わり行事を通じて政治の反動化が進み、国民の政治に対する批判を鈍らせてしまうのではないかと私は懸念しております。

結核で療養

松島 私は1935（昭和10）年3月に結核を患いました。結核は春に発病する人が多いのです。医師の診断は当初、初期感染だからすぐ治るということでした。実際しばらくして咯血が止まり、休職も3か月ですみました。ところが職場に復帰して、野球部や陸上競技の練習に熱をいれたためか、半年後に再発してしまい、数か年の療養生活をおくる結果となったのです。

療養が長引く見通しとなるなかで、私はむしろこの機会にマルクス主義など、本格的に社会科学を勉強しようと決めました。日中戦争が始まった1937年以降、この種の本を読むのは厳しい時局で、自由主義者だった河合栄治郎先生の著書さえも発禁となっていますね。

マルクス主義の文献を読むといっても、特高刑事の目を気にしながらだったのです。私はすでに1回検挙されていて、様子を探りに刑事がひょっこり訪ねてくることもありました。とにかく、この療養の数年間に趣味の映画・演劇鑑賞はできなくなりましたけれども、マルクス主義の本はたっぷり時間をかけて読むことができましたし、『万葉集』など日本の古典もよく読

みました。

こんな生活が1941年3月、私が東京・三田の田中精機に勤めるまでつづきました。この間、日銀は休職期間がきれて退職し、中央大学のほうも中退を余儀なくされました。残念ですが仕方のないことです。私には人生における別の道が用意されていたと受けとめています。

大門一樹について

松島 療養中の思い出の一つに、先年まで関東学院大学や東海大学で教授をされていた経済学者の大門一樹さんとの語らいがあります。大門さんは十何年か前に『物価暴動をおこそう』とか、『物価犯罪 大企業の暴利白書』(1974年)などを出版され、消費者の視点から企業の社会犯罪を研究され、告発されている学者です。

大門さんの家は、私が住む高野山東京別院の境内入り口のところにあり、彼は私より6、7歳上でした。大門さんは京都帝大の経済を出たのですが、彼も結核で浪人中でした。私は散歩の途中、大門さんを訪ねては、進行中の企業合同や統制経済の問題について教えてもらいました。彼は財閥支配の実態分析に関心をもっておられ、「日本経済の問題は財閥支配にあり、財閥の支配実態だけでなく、軍部との関係をきちんと分析しなければならない」と言っていましたね。大門さんはほんとうに真摯で、誠実な方でした。

関連して、このことも紹介しておきます。私が田中精機に勤める前年の1940年春ごろ、大門さんは健康を回復されて、アメリカ系銀行の東京支店に就職が決まりそうになりました。けれどももし日米戦争が始まったら支店は閉鎖されてしまう、さあどうしよう、と相当悩んでいました。私は日銀時代に太田超さんという人に可愛がってもらいました。太田さんがアメリカ経

済の分析をされていたことを思い出して、二人で彼を訪ねて相談したのです。

太田超さんは第一高等学校、そして昭和5年に東京帝大の経済を出られた方で、先年まで日銀の名古屋支店長をされていました。日銀の野球部では彼がピッチャー、私がキャッチャーでコンビを組んでいたのです。太田さんの話では「経済力に格段の差があり、戦争は有り得ない。戦争をしたって日本は勝ち目がない」とのことでした。それで大門さんは安心してアメリカ系の銀行に就職したのです。ところが、そのアメリカ系の銀行が間もなく日米戦争の勃発を見越して東京支店を閉鎖したのです。大門さんは入社して間もなく退職となり、代わって『ダイヤモンド』という経済雑誌を発行している出版社に勤めて論説記者をなさっておりました。

田中精機に入る

松島 私は1941年春、田中精機株式会社に経理事務員として入社しました。私の親父は職人で、貧乏でしたが人が困っているのを見ると助けないでいられない性分だった。また私の兄と姉が銀座の三越デパートに勤めていて、二人とも親譲りの世話好きでしたから、家には三笠宮と知り合いという人を含めて多くの人が入り込んでいたのです。そのなかの一人に田中精機の社長と知己だという人がいまして、彼の紹介で勤めました。

田中精機は、大森に本社がある田中航空計器という軍需工場の下請企業でした。1945年3月の東京大空襲のあと、6月ぐらいに工場の一部が上野原村(山梨県)に疎開しています。私は終戦までの短期間、上野原工場に異動しましたが、終戦後は三田の工場に戻って復旧作業を手伝い、1947年の3月まで勤めました。

石村海三さんの話では、松島さんは総務課長だったそうですね。1945年2月に石村

さんが田中精機に入社するさい、松島さんから面接を受けたと言っておりましたが。

松島 そうだったのかなあ。田中精機は、町工場に毛が生えたぐらいの規模で、学徒動員で回されて来た少年工や女子挺身隊をのぞいて200人ちょっとの工場です。だから事務組織もたいへん簡単で、部署としては経理や総務がある程度でした。

私は終戦のときちょうど30歳でしたが、確かに事務部門の責任者のような存在になっていました。経理のほか、総務関係では資材調達や製品の納入をはじめ、寄宿舎の舎監、動員学徒の世話、それに東北地方の職業紹介所や職業指導所などを回って労務者の募集もおこなっていました。のちに医務係や、敗戦直後には食糧の買出係もやっていましたね（笑）

ほかに、工場産報の事務を社長に代わっておこなったり、産報を通じて配給される日本酒、タバコ、衣類、軍手、長靴などの物品や、事務用品の保管係もしていました。

田中精機は、満期となった政治犯や、仮保釈中の思想犯を積極的に受け入れていたのですか。というのは、石村海三さんは、岡部隆司・長谷川浩ら日本共産党再建グループのメンバーでした。

石村さんは1940年8月に検挙され、東京・中野区の豊多摩刑務所で服役して45年2月に釈放されています。そして、保護観察所に挨拶に行ったおり、職場として田中精機を紹介されたと言っているのですが。

松島 田中精機の社長は、三田警察署管内における地域ボスの一人で、警察の下部機構の役員をしていましたね。また社長は保護司だったのか、そのような世話役を務めていました。だから保護観察中の思想犯を預かったり、満期出所した思想犯の仕事の面倒をみていたのだと思いますね。

この点は、私にとりまして好都合でした。私には検挙された前歴があり、三田警察署の刑事が動静を探りに工場に来ていました。私は事務部門の責任者のような立場になっていて、社長から信頼されてもいたので、刑事が来て社長は「問題はない」とかばってくれていたのです。

もちろん私自身、工場の器具置き場に穴を掘ってマルクス主義の本を埋めるなど、細心の注意をしていました。天皇プラカード事件で検挙されたときも社長夫妻はなにかと世話をしてくれまして、この点、私は社長に対して現在でも感謝しているのです。

国分一太郎と知り合う

松島 先年（1985年2月12日）、教育学者の国分一太郎さんが亡くなりました。国分さんは新しい国語運動、いわゆる生活綴方運動の指導者として知られていますね。彼は太平洋戦争が始まる直前に検挙され、山形刑務所で服役し、1943年秋ぐらいに出所と同時に上京、日本タイプライター三田工場（前身は中島機械製作所）に勤めました。

日本タイプライター三田工場は、田中精機のほんの筋向いにありました。戦時中は工場ごとに産報国会が結成され、また隣接する数工場がまとまって「産報隣組」のような組織もできていました。私はその「産報隣組」の会合や彼の工場に訪ねてよく話し合いました。

産報運動についてですか。

松島 いや違います。文学や芸術、あるいは青少年の生活教育や生活補導に関してです。私は寄宿舎の舎監を兼ねていましたが、じつは国分一太郎さんも日本タイプライターには厚生・労務係として入られ、寄宿舎の舎監をしておられたのです。

知りませんでした。

松島 私は、青年労働者や学徒動員の少年工に対しては戦時下の厳しいなかにも本を読み、思索する時間をもつよう努めて指導していました。とくに留意したのは、習慣として生活日記をつけ、あるいは実家の親兄弟や友人に手紙を書くよう促してもおりました。私は以前から国分さんの生活教育について承知していましたから、寄宿生の生活指導や少年工に対する文化・教育上の指導について彼によく相談したのです。

国分さんとの接触は多少、リスクもありました。国分さんは転向を受け入れて出所したわけですけれども、日本タイプライターに入社したのちも、特高刑事にしつこく付きまとわれていました。私も検挙された経緯があります。二人が目立った会い方をすれば疑われる。だから、私は慎重に「産報隣組」などの会合を利用して彼に会っておりました。

このことも紹介しておきます。日本は敗戦となって、1945年11月ごろから翌46年にかけていっせいに労働組合が結成されました。私自身、45年の11月初めに日本共産党に入党し、また田中精機に労働組合を結成して委員長に就任しました。少し遅れて、日本タイプライター三田工場にも組合が結成されました。

この組合結成を中心となって指導したのが国分一太郎さんでした。国分さんの組合は1946年に生産管理闘争をおこなうなど、当初はとても急進的だったのですよ。国分さんは私と同じ1947年の3月に会社を辞めています。そして、ご承知のように彼は戦後、生活綴方運動の復興や児童文学の著作、日教組教研集会の講師として活躍されていますね。

仲間づくりに腐心

松島さんは戦時中、産業報国会を隠れ蓑に反戦的な、あるいは厭戦的な活動をなさ

った事実はあったのですか。

松島 そうしたことを自覚してのオルグ的な活動はしていないし、実際にもできなかったのです。太平洋戦争が始まると、軍需工場は下請を含めて、軍の直接管理となっていて、憲兵隊や警視庁工場課の刑事が張り付くような形で現場作業が監視されていました。厭戦的な言動ですら、どういうわけが彼らは嗅ぎつけて、こんどは特高課の刑事が動き出すのです。

とうぜん表立った活動はできやしない。私の場合はせいぜい仲間づくりに努め、先ほどの繰り返しになりますけれども、青少年労働者や寄宿生に対して親身になって世話をしたり、作業工程や条件を工夫・改善したり、事務部門の責任者として彼らの求めに耳を傾ける程度のものでした。

年表を見ますと、1944年8月23日に女子挺身勤労令が公布されています。これは女性の勤労働員を定めたもので、この結果、女子専門学校や女学校の生徒、さらには地域婦人会の会員が徴用され、田中精機にも動員されて補助的な作業に従事していました。

題名は忘れたけれども、婦団連が『ひたすらに生きて』というようなタイトルの本を出していますね。その本のなかで、浦辺さんが田中精機に勤めていたころの思い出を書いておられます。竹代さんの亭主は浦辺史(うらべ・ひろし)さんといって、最近まで名古屋の日本福祉大学の学長をなさっておりました。当時、亭主は獄中にあり、竹代さんが幼子を抱えながら住み込みで、女子寄宿舎の係として働いていたのです。

寄宿舎には、青山学院女子専門部の学生さんが大勢泊まっています、私は、浦辺竹代さんや引率で来ていた児島美都子(旧姓・長美都子)さんがなにかと困っていた様子でしたので親身に相談に乗ってあげ、とにかく生き抜くことが大

事だと励ましつづけておりました。児島美都子さんは現在、日本福祉大学の教授をされていますよ。

2 敗戦と労働運動の復活

自分史執筆の困難さ

松島 つぎに、田中精機労組の結成と東京・南部地区における労働組合の復活について話します。

私は20年前に『夜明けの足音』（新かながわ社、1969年）という、自らの半生を顧みた小史を出しました。当時、国政の選挙に神奈川県から立候補すべきだという話も出ていて、この機会に自らの歩みを記録しようとまとめたものでした。ところが書き始めても、参考にする東京・南部地区の社会運動史年表や関連の資料が無かったのです。もちろん大原社研の『社会・労働運動大年表』（労働旬報社、1986年）も出ていない。

最近、黒河内隆さんから『民衆新聞』の存在を教えてもらい、私が関係した当時の運動について部分的に裏付けることができました。大原社研からも、食糧メーデーや天皇プラカード事件について、裁判関係のコピーを含めて送ってもらい、これらの資料でより詳しく確認することができました。けれども当時は、自らの活動の追跡、あるいは運動の背景を点検・調査をおこなうことなく、おぼろげな記憶と断片的な資料でまとめたのでした。

私は、天皇プラカード事件で検挙されて話題にされるようになりました。私はその昔、ある作家から、天皇プラカード事件について作品としてまとめたので協力願えないかと頼まれました。私は、自らの思いや史実を歪められて紹介されてしまうのではないかと、あるいは第三者の作家が書くより当事者の私が書く方がよりリ

アリティが出るのではないかと思います、現在にいたりました。

当事者はむしろ書けないと思いますね。

松島 ええ。そこで、私はこれまでの考えを転換しまして（笑）、食糧メーデーと天皇プラカード事件については、関連の文献を参考に、まずは現時点での記憶で回顧し、さらに先生方から問題点の指摘や質疑を受け、それらの確認作業を重ねながらまとめたいと思っております。

社会運動再建の遅れ

お手紙によりますと、松島さんの社会運動家としての活動は、1945年10月10日、芝田村町1丁目の飛行会館における「自由戦士出獄歓迎人民大会」への参加から始まったということですね。

松島 そうです。私は終戦後1か月ぐらい、工場における敗戦処理に忙殺されました。他方で、親会社からの航空用計器の注文がストップし、田中精機自体、どう民需転換をはかって生き残るのか、社長から頼まれて会社の再建案を思案する日々でした。私の場合、飛行会館における政治犯の出獄を歓迎する集会に参加したのが、人生をかえた、また社会運動家としての活動の始まりとなっています。

戦後日本の社会運動は、1945年10月10日に“獄中18年組”の徳田球一・志賀義雄さんらが府中刑務所を出獄してから始まったといわれていますね。その立ち上がりは敗戦から約2か月後のことであまりにも遅い。戦前に反戦・反ファシズムの人民戦線が結成されなかったことや、天皇制の弾圧で日本共産党の組織や労働組合などが根こそぎ潰されてしまったことなど、いくつか理由があげられますが、私自身は、治安維持法が敗戦後の10月15日まで存続したとい

う問題があると思いますね。

前月9月2日に軍隊が解体され、11日に東条英機など戦犯指導者が逮捕されました。けれども治安維持法だけは敗戦後2か月も存続したのです。この間、10月4日にマッカーサー司令部が人権回復の民主化指令を出しましたが、旧体制はなおも抵抗して治安維持法だけは廃止しなかった。これは、治安維持法が天皇制の“最後の砦”となっていて、旧権力が天皇制の打倒をめざす運動を阻止するねらいがあったからだと思いますね。

なるほど。

松島 私は、日本の社会運動が敗戦後2か月もその復活が遅れたのは、治安維持法がなおも存続していて、社会運動に対する抑止力となっていたからだと思っています。実際に当時の新聞は、天皇制を否定するような「不穩」の活動に対しては治安維持法で取り締まるという、山崎巖という内務大臣の声明を発表して、これを読んだ記憶があります。

敗戦後、私は日本タイプライター三田工場に国分一太郎さんを訪ね、労働組合の結成について相談しました。10月初旬、マッカーサー司令部が10月4日に人権確立の指令を出した翌日だったと記憶する。けれども国分さんが「治安維持法が残っているもとは危険だろう。もう少し様子を見よう」ということになり、私もこの提案に同意したのでした。

旧権力機構が崩れ、占領軍が政治犯の釈放や人権確立の指令を発しても、民衆はなおも警戒的で、治安維持法の威力は残っていたのです。その恐怖心は、治安維持法で検挙・投獄された人以外にはわからないと思いますね。

残像のようなものがあったのでしょうか。

松島 いや、実像なのです。治安維持法は撤廃されていませんし、その恐怖が骨に染みつい

ていました。私の場合、中野署の監房に回され、数週間にわたって取り調べられましたが、このときに受けた暴行で1年近く下半身がしびれていました。

自由戦士出獄歓迎人民大会

松島 さて、1945年10月10日における政治犯の釈放を歓迎する集会のことですが、初めは日比谷公園でおこなう予定だったのです。ところが当日は朝から雨で、午後になって土砂降りとなり、会場が芝田村町の飛行会館の講堂に急きょ変更されました。会場は、私の工場から歩いて二十数分ぐらいのところがありました。

伊藤憲一さんの挨拶と司会で始まった集会は、5階の講堂入り口の通路にも参加者があふれるほど超満員でした。講堂にはたぶん1000人近く入っていたと思いますね。ほかに講堂に通じる各階の階段や、会館入り口周辺にも入館できなかった人が大勢集っていました。

参加者の多くが朝鮮人だったそうですね。

松島 そうだったかもしれない。ハングルが会場のあちこちで飛び交い、講堂内でも太極旗が振られ、のぼりも立っていました。集会が終わって押し出されるような形で入り口に出たら、雨のなか大勢の朝鮮人が玄関先で「解放万歳」「治安維持法を廃止しろ」などのスローガンを叫んで集会をおこなっていました。参加者がマッカーサー司令部に隊列を整えてデモ行進する前のことです。

集会のシーンはいまでもはっきりと記憶しています。とても感動的な集会で、私が民主主義日本の建設に一人士として参加しようと決意を固めた日でもありました。集会では、豊多摩刑務所を出獄したばかりの神山茂夫さんや、2週間前に横浜刑務所を出たという酒井定吉さん、朝鮮人の金斗鎔さんなどの政治犯が演説をぶ

ち、天皇制打倒や日本軍国主義指導者の戦争責任を追及していましたね。また徳田球一さんや志賀義雄さんなどは、事情があって集会に参加できなくなったこと、宮本顕治さんが網走刑務所を出獄したというような報告が伊藤憲一さんからありました。

朴烈救出の訴え

松島 この日、会場で『人民に訴ふ』というパンフレットが売られ、私も一冊買い求めました。そして会場でこれを読み、徳田さんら“獄中18年組”をはじめとする政治犯の過酷な状況のなかにも、時代動向と情勢の分析力にほんとうに驚嘆しました。ところで、集会における参加者の多くが在日の朝鮮人であったとの話がありましたが、関連して紹介しておきたいことがあります。

どうぞ。

松島 一つは、会場で在日朝鮮人のアナーキスト・朴烈（パク・リョル）の救出に関して提案がなされ、満場の拍手でその即時釈放が決議されたことです。提案者は、布施辰治弁護士であったと記憶する。布施さんは、演壇で「戦争が終わったのに、治安維持法や治安警察法の容疑で捕まった政治犯がまだ釈放されないでいる」としてこれを糾弾し、一例として、朝鮮人の朴烈が現在なお秋田刑務所に囚われていることを紹介したのでした。

今回、間違っただけとはいけないうと、金一勉著『朴烈』（合同出版、1973年）を調べてきました。著者は法政大学の哲学科を卒業されたようです。朴烈は、関東大震災の年の1923（大正12）年9月2日に治安警察法違反で検挙され、のちに「天皇暗殺を謀議した」という容疑が追加され、これにより大逆罪も加わってつごう22年2か月も在獄したそうです。この数字は、著者が布施弁護士の調査によるものとして紹介してい

るのですが、政治犯の在獄期間としては日本で最高記録だそうです。

朴烈は、1945年10月27日、秋田刑務所を出獄しています。政治犯としては最後の運動家だそうです。これ（『朴烈』）の本文や年表に出ていませんが、朴烈は、1945年12月8日、東京・共立講堂で開かれた「戦争犯罪人追及人民大会」に出席して演説しています。

この大会は人民解放連盟という、実際は日本共産党が自由法曹団や解放運動犠牲者救援会（のち日本国民救援会）などに呼びかけて結成した団体が主催したものでした。

大会は、天皇はじめ軍閥、官僚、財閥、そして率先して戦争に協力した作家や知識・文化人など1000余名の「戦争犯罪人名簿」を発表しました。

朴烈は朝鮮人代表として、鈴木東民、伊藤憲一、志賀義雄さんらと並んで演説をしました。私は朴烈の演説に、秋霜烈日のような千古の気概を期待したのですが、実際は「天皇は化け物である」とか、「天皇を呪う」というような調子のお話で、大衆を納得させる演説ではなかったのです。22年間も牢獄にあったためか、情勢の激変が飲み込めない何か不安げな顔つきで、抑揚のない演説でした。

G H Qまでデモ行進

松島 関連してもう一つ紹介します。私らは集会後、政治犯釈放の指令をはじめ、日本における民主主義の確立がG H Qによる民主化指令で端緒が築かれたのは事実であり、このことに対して感謝の意を表そうと司令部がある日比谷の第一生命ビルまでデモ行進をしました。そして、夕方になってG H Q本部に到着したのですが、とつぜん方々で「人民解放軍万歳」が唱えられたのです。私はデモの前列近くにおりました。この万歳三唱を中心となって煽っていたの

が椎野悦朗なのです。

日本共産党の50年分裂時に、臨中(臨時中央指導部)の議長をされた椎野悦朗さんですね。

松島 そうです。「あの人が椎野悦朗だ」と、同じ隊列の朝鮮人に教えてもらいました。椎野さんは戦後すぐの時期は、徳田球一さんの側近の一人で、府中刑務所でも一緒だったらしい。椎野さんがデモ隊の先頭について、彼が音頭をとって何回も「人民解放軍万歳」を三唱したのです。

この万歳三唱ののち、代表者数人がマッカーサーの副官(サザランド参謀長)に面会することが認められたのです。そして代表者が、副官に対して政治犯釈放に関するマ司令部の尽力に感謝の言葉を述べたわけですが、副官も「よく了解した」と述べたといわれ、そういう報告が代表者から玄関前で待っていた私らのデモ隊にありました。

私はあの時点で、アメリカ軍を中心とする連合国の軍隊を「人民解放軍」だという評価をよく理解できなかったのです。私は隣の朝鮮人に「アメリカは帝国主義国ではないのか」と訊ねた記憶があります。当日、買い求めたパンフレット(『人民に訴ふ』)にも、占領軍は「人民解放軍」だとして書いてありましたね。

現時点で考えるなら、占領軍の存在とその政策はアメリカ軍が主体であり、限界があったけれども、民主主義と平和日本の形成に一定の役割をはたしたことは否定できない事実で、「人民解放軍」と理解することは必ずしも間違いではない。だが私は当時、アメリカ軍に対して「人民解放軍」と規定して万歳をおこなうことに奇異の念を抱いていたのです。

日本共産党に入る

松島 私の入党は1945年11月6日だと思いま

す。2日後に、党の再建を確認する全国協議会が開かれているからです。きっかけは、田中精機に労働組合をつくろうと私は出来たばかりの代々木の本部に出かけ、受付にいた黒石というのちに青共(日本青年共産同盟)の委員長が何か務めた人に要件を伝えました。そうしたら、彼がなにを勘違いしたのか、「京浜地区の責任者は春日正一です。春日さんは川崎市八丁畷の東芝の共和寮にいます」と言われ、私はその足で川崎に向かいました。

春日さんは当時、東芝の共和寮に住みついて共産党の組織や労働組合の結成を指導していました。春日さんと会い、労働組合のつくり方について話を聞いた後、私は「青共に入りたいが」と頼みました。そうしたら、側にいた内野竹千代さんに「なにを言うんだ。党に入れ」と言われ、私の職場は東京の港区でしたが、そのまま神奈川県で入党したのです。そして私自身、党の全国オルグをへて1950年に川崎市に移転してきました。

内野さんは日本社会主義同盟以来の活動家で、1928年の3・15事件後に共産党に入れ、戦時中は何年も獄中にありましたが、戦後、神奈川県で党組織の再建に尽力された方です。

このような経緯で、私は活動家としての第一歩を踏み出したのです。数日後に、遅れても11月中旬には戦時中から信頼関係を築いていた仲間を誘って田中精機従業員組合を結成し、私が委員長に就任しました。そして翌12月に、遅れても年が明けた1946年1月初旬に、こんどは日本共産党の細胞をつくったのです。なお、労働組合のほうは、都の指導があって正式に労政事務所に届け出たのが1945年12月のことです。

城南労協の結成

松島 私は1946年1月6日、石井鉄工所蒲田工場で開かれた城南地区工場代表者会議に出席

しています。先日、1946年1月10日付の『民衆新聞』（第11号）のコピーをながめていて思い出したことがあります。

何でしょうか。

松島 『民衆新聞』のこの号は、山川均が人民戦線の即時結成を提唱した号として有名のようです。またこの号は、私が出席した城南地区工場代表者会議に関する記事がイラスト入りで掲載され、入党直後における私の活動の一端を紹介しているのです。このイラストは、ストーブを囲んで30名が討議している様子を描写しています。立って演説しているこの人物は、メガネや姿格好からして明らかに私だと思えますね。

この記事が『民衆新聞』に送ったのは、当時日本労農通信社に勤めていた大窪という記者です。大窪さんは現在、身体が弱っていますが川崎市で焼鳥屋をやっています。大窪さんは二人兄弟の兄で、弟の方は占領末期に石母田達さんと「柴又事件」で逮捕されています。大窪弟は、のちに横須賀医療生協の理事長として活躍されました。

城南工代会議より10日ほど前、1945年12月25日に六郷川をへだてた川崎市の池貝自動車の組合事務所において、神奈川県工場代表者会議が開催されています。これを中心となって企画したのは春日正一さんです。春日さんらは、石井鉄工所の伊藤憲一さんと連絡をとり、神奈川県工代会議につづくものとして、前日（1946年1月5日）の石井鉄工所における準備会の会合を経て、城南地区工場代表者会議を開催したので

す。この城南工代会議は、日本労働運動史上、画期的な集会であったと思います。これ（前出『民衆新聞』第11号）にも書かれている通り、第一に東京南部における労働組合協議会として城南労協の結成を決議したこと、第二に関東労

協の結成を決議したこと、そして三番目に、日本における産別会議の結成を決議しているのです。三番目の決議では、「全国的な産業別単一労働組合を急速に結成する」とうたっています。

産別会議の原点は、城南地区工代会議にあるのです。

松島 そうです。もう一つ、当日の集会で注目されるのは食糧闘争の重要性を提起して、「労働者の団結の力で官僚的な米の供出、配給機構を粉砕するとともに、生産をサボっている資本家を強制して農民に必要な肥料、器具、生活必需品等の生産を増加して農民が喜んで供出するように努力する」（同）との方針を決議していることです。

私事ですが、この食糧闘争を労働組合として取り組むよう提案したのは私でした。私の住む港区では、前年すなわち1945年11月以降、米や馬鈴薯などの遅配・欠配が始まっていて、食糧がないので仕事どころか、仕事もほとんどなかったのですが、とにかく主食の配給が5日、1週間と遅れ、食糧問題が社会問題になりつつありました。

とうぜん食糧確保の闘争は労働組合における緊急不可欠の課題として浮上していたのであり、労働組合が社会的課題をになう組織であることをアピールするためにも取り組まなければならないのではないかと思います、提案したのでした。

工場細胞会議

松島 この提案は、前日の同じ石井鉄工所で開かれた城南地区における党の工場細胞会議の席上、私が問題提起したことに対して、伊藤憲一さんが「食糧問題は切迫した大事な問題だ。運動方針に入れよう」ということで決まったと記憶しています。

1946年1月5日の石井鉄工所における工場細胞会議は、伊藤憲一さんが招集したのですか。

松島 伊藤さんを含む、党中央が企画・招集したのでしょうか。私は前の年の12月下旬、本部に『赤旗』(セッキ)を受け取りに行ったさい石村海三さんと会い、彼から「年明けの1月5日に伊藤憲一さんの工場で南部地区の工場細胞の会議がありますから出なさいよ」と言われたのです。石村さんは戦時中、岡部隆司を中心に長谷川浩が関係した共産党再建グループのメンバーだったようで、敗戦後は1946年2月ぐらいまで、東京・南部地区における労働組合結成のための専任オルグでした。

当日の出席者は伊藤憲一さんのほか、長谷川浩、石村海三、木村三郎らの専任オルグ、それに東京・南部地区における工場細胞の責任者15、6人だったと思います。目的は前年12月の第4回大会において決定された、党の組織をどう早期に生産点に構築するのか、また翌日における城南労協結成に関する協議、などであったと思います。

私は、1月6日の城南労協の結成より、前日の工場細胞会議のほうをより鮮明に記憶しております。私は入党して最初の、しかも戦前以来のお歴々の幹部と面識をもった会合であり、私の考えや提案が即座に聞き入れられ、運動方針として採用されたのです。「日本共産党のオルグを命ずる」というような辞令をもらったわけではないけれども、当日、伊藤さんから長谷川浩に紹介があり、そして私が党組織や組合結成のオルグとして認められ、活動家の第一歩を記した日だったのです。

松島さんの提案が採用されたとは、「食糧闘争を展開すべし」という提案のことですか。

松島 そうです。ほかに組合結成策との関連

で「青年・婦人に働きかけよ」「婦人年少労働者の権利を確立せよ」などの提案もあります。私は、戦時中から田中精機の舎監をしていて、このことの重要性を痛感していました。

また『資料労働運動史』(昭和20・21年版)に、城南地区工場代表者会議で決定された運動方針として、「生活費を基準とする労働立法(最低賃金制の確立、団体協約、44時間労働、少年婦人労働保護)」が決められたとありますね。少なくとも「少年婦人労働の保護」の問題については、私が提案して決まったのです。

長谷川浩について

松島 長谷川浩については、1945年12月8日、共立講堂における戦争犯罪人追及人民大会で演説をされていたので承知していました。けれども挨拶を交わして面識を得たのは、1月5日における工場細胞会議のときが初めてで、以来、私は1946年2月25日における日本共産党5回大会の時点まで、伊藤憲一さんが初代の労働組合格長をおりて長谷川さんに代わったのちは、彼の指示を受けてオルグをしていました。

長谷川さんが有能な指導者であり、私自身、理論面でも指導を受けましたが、どのような活動歴の方なのか承知していませんでした。彼は、戦争犯罪人追及人民大会のさいの肩書は「労働組合促進会代表」で演説をされ、城南労協が結成されて以降、「城南労協代表」を名乗っていました。

長谷川さんは体格がよく、徳田(球一)さんとはまた違う形で断定的に、ある意味では権威的にあれこれを指示する人でした。体格と言えば、戦争犯罪人追及人民大会のときは横浜刑務所から出てきたばかりだということに、大変太っていて、演説で「諸君、われわれ労働者は飢えている」と言ったとき、方々から失笑がもれたのです。

長谷川浩さんは第一高等学校で、また東京帝大でもラグビー部員だったようです。現在と違って、昔はがっちりした体格だったようですね。

松島 父親が三菱財閥の岩崎家と関係があるとか、長谷川さん自身、横浜刑務所を釈放されるまで病監の雑役係だったということを後で知りまして、納得したことがありました。

刑務所の病監は、重病者や死にかけた囚人を世話する特別の施設ですよ。病監内の囚人は食欲がないわけで、大変なご馳走であっても食べることはできない状態だったろう、と推測されます。飯は大量に残るわけですよ。彼はその残った飯を存分に食べていたので太ったのだ、という話のある人から聞いてなるほどと思った次第です。

とにかく長谷川さんは当時ずう体で、異様に太っていました。私などはやせ細り、冬場はぼろ隠しや保温のために、ズボンを二本重ねてはいていました。外套は春日正一さんに差し上げたので無く、これも外着を二枚重ねて防寒していました。それでも私の場合、欠食がつづいて太った感じにはならなかったのです。

オルグとなる

松島 1946年1月5日以降、私は事実上、日本共産党のオルグとして活動を始めました。朝7時に工場で食事をとり、午前9時ぐらいまで事務をおこない、おじやを詰めた飯盒を腰にぶら下げて代々木の党本部に出かけ、10時からのオルグ会議に出席していました。

会議に出て、各地区の責任者やオルグが報告をおこない、徳田さんの檄や伊藤憲一、春日正一、長谷川浩、寺田貢さんらの情勢報告や説明などがあつた後、各人が受け持ち地区に出向くのです。そして、夜は7時か8時に工場に戻って朝の残りの事務を済ませ、寄宿舎に戻って寝

るという毎日でした。こんな生活が天皇ブラカード事件で逮捕されるまでつづきました。

会社は、田中さんだけ変則な勤務を認めたのですか。

松島 会社に協力を願ったし、そういう実績をつくってしまったのです。仕事をしないで給与をもらっていたのではないかというニュアンスの質問ですが、私自身、仕事はよくしたのです。工場の寄宿舎に寝泊まりしていたので必要な場合は徹夜で、日曜日も仕事をしたことがありました。また休暇をとるさいは同僚ときちんと打ち合わせをおこない、もし事務処理の遅れなど問題が生じた場合、すみやかにこれを片付けていました。

私が仕事において、オルグ活動の結果、支障をきたしたという事実はないと思います。この点、自信をもって断言できます。

ただし、現場の古参のうちには特例扱いのような私の勤務に目を剥いていたかもしれない。けれども私は事務部門の責任を果たし、生活の上でもデタラメは一切しなかったし、他方で労働組合を通じての交渉で待遇改善を実現していました。私はむしろ犠牲的に、労働社会の成立をめざして活動していたのであり、同僚から共感と支持を得、結果として在職中、私の勤務が問題になるようなことはありませんでした。

オルグ活動では、おもにどの地区を受けもちましたか。

松島 東京の南部地区です。南部といっても大田・大森のほうは伊藤憲一さんが、私は港区から品川区にかけての経営支部を受けもちました。企業名でいうと池貝鉄工所三田工場、沖電気、日本電気などであり、ほかにもろもろの中小工場があります。

国鉄の場合、品川から田町にかけて東京機関区、品川電車区、田町電車区、品川検車区など職域支部があります。共産党はこの国鉄の組織

について特別に重視し、長谷川浩が専任オルグとなって、市吉君や鈴木勝男、鈴木市蔵らに働きかけていましたね。国鉄の場合、私の任務は労働組合対策でなく、党の組織を築くことでした。

オルグはどのような形でおこなわれたのですか。

松島 決まったパターンなどはないのです。もと全協の活動家だった労働者を工場に訪ねるとか、「組合結成の件で来ました」とアポなしに工場の総務課を訪ね、もちろん了解を得てですが直接訴えたことがありました。また争議が始まったという情報をキャッチして工場に駆けつけ、争議指導を通じて組合結成の重要性を説いたこともありました。

オルグ活動の基本的なねらいは、各工場に労働組合を結成し、先進的な労働者に入党を勧めて、最終的には共産党細胞の結成までもっていくことにありました。

この点、池貝鉄工所の三田工場の場合はわりかし順調に進行しました。きっかけは1945年11月か12月初め、豊田四郎さんと出会い、その関係で石母田達さんと接触したことでした。

豊田四郎さんは野呂栄太郎の弟子で、戦時中は慶応大学の助手か講師をしていたらしいが検挙され、大学を追われたそうです。豊田さんは戦後、大学に復職する一方、羽仁五郎、石母田正、平野義太郎さんらを講師に「自由大学」を主宰し、頼まれて事務所を田中精機の寄宿舎に置きました。あるとき事務局を手伝う学生に、日本マルクス主義史学の大御所である石母田先生の弟が復員されて池貝鉄工所にいると教えられ、訪ねて「入党してくれないか」と強引に勧誘したのです。彼は誘導爆弾を研究していた陸軍の技術将校でしたが、敗戦となって職種転換し、池貝の三田工場で旋盤技師となっていたのです。

石母田達さんは当初、入党について躊躇したのです。けれども彼は誠実に生きる人間でしたし、軍人だった自らを顧みて日本の将来を考えていたようで、彼のほうから連絡があって入党したのです。池貝鉄工所には、戦前以来の活動家や共産党に関係した生き残りが何人かおりました。達さんらが加わって、党の細胞も短時日のうちに結成されたのです。

労働組合結成の背景

松島 オルグ活動において、私らが工場側や職制から妨害を受けたという事実はありませんでした。日本労働運動史上、有名ですが読売争議や東芝争議において組合側が勝利し、また伊藤憲一さんの石井鉄工所が争議の結果、賃金を5倍、6倍に引き上げるなど、当時の激しいインフレーションのなかで組合結成が話題となり、支持されていたからです。だから「労働組合を結成すべし」という訴えは、打てば響くような形で広がっていきました。

G H Q 自体、労働組合の結成を奨励していましたね。

松島 そうです。これが、戦後の日本において労働組合が短時日のうちに大量に結成された基本条件だったと思いますね。

当時、労働組合が日本の再建と民主化になうという位置づけで奨励されていたのです。これはいわば「錦の御旗」で、資本家であれ経営者であれ、だれも組合結成には反対できない。もし反対があればG H Qの担当部署、労働組合課などに善処をもとめました。また会社側が妨害ないし反対した場合、私らは「占領軍に訴えるぞ」とか、「占領軍の民主化に反対するのか」と強い態度に出ていました。

会社側が不承不承、労働組合の結成に協力せざるをえない状況のなかで、労働組合は形態としては工場単位に、会社側がバックアップする

形でいわば企業別組合として結成されていきました。

私はここに、会社側の深慮遠謀を見てとることができると思います。どうせ労働組合を結成しなければならない状況にあるならば、まずは時勢に合わせて組合を結成し徐々に御用組合化、ないしは会社組合にしていけばよいのではないかと会社側が考えても不思議ではないと思います。また情勢や状況をみて、第二組合をつくってもよい、と考えたかもしれない。

大河内一男先生が、岩波新書の『戦後日本の労働運動』（1955年）だったか忘れたけれども、なにかの本で、日本の労働組合は戦前の産業報国会を母体にこれを裏返したような形で成立している、と書いておられたのを読んだ記憶があります。戦時中に、工場や事業所単位に結成されていた産業報国会が、こんどは企業別の従業員組合として生れ変わった、ということなのでしょう。

田中精機の労働組合も、社長と2、3人の経営管理者をのぞいて従業員の全員が加入していました。組織形態で見ると、事実上、産業報国会から企業別労働組合への裏返しとなっています。

労働組合が企業別に結成されたことについて、私らオルグ仲間においても懸念がありました。労働組合は、あくまでも産業別に結成されるべきで、企業別組合となった場合、資本・経営との関係で、将来に問題を残すことが予想されたからです。

懸念とは、組合が資本・経営側の論理や利害に引き込まれ、主体を失ってしまうと

いうことでしょうか。

松島 そうです。だからこそ、私らは労働組合のオルグ活動でも「御用組合反対」とか、「組合は資本・経営から独立しなければならない」というようなスローガンを掲げました。党本部のオルグ会議でも、野坂（参三）さんや長谷川浩が「総同盟の路線ではなく、産業別に労働組合の結成をすすめなければならない」と強調しておりました。先ほど言いましたように、城南工代会議でも産業別の労働組合の結成を決議していますね。

ところが、GHQの奨励があって早いうちに労働組合を結成しなければならない状況・情勢のなかで、産業別の労働組合の結成は名目となってしまっ、「企業別組合は、のちに産業別に整理すればよいではないか」ということになってしまいました。

実は、これが間違いだったのです。高野率らの総同盟も、最初のうちは産業別に組合をつくるべきだと主張していました。のちに総同盟は産業別・職業別組合と、これを地域別に結集する方針に転換しましたが、全体の状況として、とにかく早期に労働組合を結成することが日本の民主化のために重要なことなのだ、ということに合意されたのです。GHQの労働組合課もこのことを望んでおりました。

日本労働運動の不幸の一つは、労働組合が企業別組合として結成され、資本・経営との関係で、独立性や主体性の点で弱さを内包させていたことにある、と私は思っています。

（つづく）